

経営部門

岡山県岡山市

松崎 隆・松崎 まり子さん

今の私たち、酪農家^{みょうり}冥利に尽きます！

～市街化が進む中、土地循環型酪農で目指した
地域のオアシス～



松崎夫妻

松崎隆・まり子さんの酪農経営は、隆さんが昭和46年に後継者として就農し、翌年にまり子さんと結婚してからは、市街化が進む地域において、夫婦2人と後継者で経産牛約60頭規模を維持しながら、借地による飼料基盤の拡大を図り、土地循環型経営を確立している。

平成20年度の所得1,600万円、所得率約30%を確保している。適正なたい肥処理や悪臭防止に努め、「牧場ファンクラブ」による酪農体験活動を展開する一方で、自家育成の健康な牛から搾った高品質な牛乳を原料に、平成19年からは、牛舎そばにジェラート工房を建て製造販売を行うなど、地域において酪農の理解者を増やす活動に力を注いでいる。また、家族経営協定を締結し、作業分担の明確化を図るとともに、長期負債なしの堅実経営を実践し、高い収益性を実現している。松崎さんの酪農経営の特徴は、以下の5点である。

第1に、市街地化が進む地域において農地の集積を積極的に行い、同時に稲ワラ収集と自給飼料生産に力を入れて、自給飼料に基づいた資源循環型酪農経営を確立・展開している。平成23年度には隣接地に20m道路の開設を控えており、今後の農地集積は困難化する恐れもあるが、酪農の基本である土地循環型経営の考えは変わらない。

第2に、借地と耕畜連携による飼料基盤の確保と飼料費低減のため、以前は、スーダンとイタリアンの輪作体系と水田裏作のイタリアン生産と稲ワラ収集で粗飼料を確保していた。平成8年からロールベールサイレージ体系に移行し、生産性の向上を図り、平成13年からは新たに水田を6ha借り受け、合計12haを確保し、そのうち約9割が借地となった。平成19年から耕畜

連携による稲発酵粗飼料の利用を始め、裏作利用の水田に飼料用稲を作付けるようになり、稲ワラ収集量は減少したが、粗飼料確保量は拡大した。1頭当たり飼料生産面積が60.6aで、粗飼料自給率(TDN)が70.3%と高く、購入飼料費は34万2000円に抑えられ、乳飼比が40.0%と低くなっている。

第3に、高品質な牛乳生産とジェラートの製造販売を行っていること。飼養面では、搾乳牛舎と乾乳牛舎、育成牛舎それぞれで細かな管理をすることにより事故や疾病を減らし、個々の能力を引き出している。一時期高泌乳を目指していたが、牛のためにも無理をさせないで、健康な牛作りによる乳質向上を目指すようになった。このことは、こだわりのジェラート作りにつながり、安全・安心でおいしい牛乳の魅力が直接消費者に伝えている。

第4に、やりがいの創出と堅実経営を実践している。自分たちと長男夫婦の4人が経営に関わるようになったことから、常に話し合いの場をつくりながら、分担して作業を行っていたが、平成19年に家族経営協定を結び、役割分担や就業条件など改めて書面ではっきりさせた。また、自力での牛舎建設や改造、耕畜連携による飼料増産など過大な投資を行わないことで、長期負債ゼロ(酪農部門)を実現している。

第5に、平成4年ころに自然発生した牧場ファンクラブを通じて、地域の子どもたちに作業体験の場を提供するとともに、保護者にも酪農を理解し、その良さを知ってもらう活動を行っている。その他チャリティファームバザーや各種研修生の受け入れ、ジェラート工房での活動などあらゆる機会を作って、地域の人々に酪農の素晴らしさをPRし続けている。

活動のようす



▲こんな市街地に牧場があるなんて！



▲「ジェヌイーノ（イタリア語で、本物・真実の意味）」



▲花で彩られた搾乳牛舎前



▲こだわりのジェラート、ご賞味あれ！



▲酪農の基本は、草作り



▲地域の子供達の笑顔とともに
(早田均カメラマン撮影)